

# 19 世紀における東南アジア地域経済の発展と域内交易の役割

## —1820 年から 1913 年のシンガポール貿易を中心に—

平成 21 年入学  
派遣先国：オランダ王国  
小林 篤史

キーワード：地域経済，域内交易，第一次産品，中継港，商人ネットワーク

### 対象とする問題の概要

19 世紀後半以降，欧米列強による植民地化の中で東南アジア各地が工業国向けの，砂糖，鉱物，天然ゴムといった第一次産品生産・輸出を拡大することで，世界経済の周辺部に組み込まれていった過程は多くの研究が示してきた。これら対欧米遠隔地貿易を重視する従来の研究に加えて，アジア間貿易論は，東南アジアがインドや日本というアジアの工業国にも，米や砂糖などのアジアの需要に対応した第一次産品輸出を行うことで，19 世紀末以降のアジア国際分業体制にも取り込まれたことを指摘した。つまり，19 世紀後半に東南アジア地域経済は他のアジア地域（南アジア・東アジア）とは区別される纏まりをもって，世界市場だけでなくアジア市場においても「二層に周辺部化」されたことになる。19 世紀の東南アジア地域経済の展開は欧米列強との関係のみならず，「アジアにおける東南アジア」の位置づけを考慮した，多層的構造の中で分析され始めたのである。

### 研究目的

本研究の目的は，これまで欧米による植民地化や，アジア国際分業体制の枠組みで分析されてきた 19 世紀後半の東南アジア地域経済の発展を，新たに東南アジア域内交易の視点から考察することである。先行研究は域内交易を，工業品と第一次産品の交換による中継貿易に過ぎないとして重視しなかった。しかし古くから地域内部の交易が発達していた東南アジアでは，ローカルな商人ネットワークのイニシアティブで域内交易は動いていた。しかも域内の商人ネットワークは，第一次産品生産者の食料需要に域内で生産された米を供給する域内分業を創出し，自律的な地域経済の発展を促進した可能性がある。本研究では 19 世紀を通じた東南アジア域内交易の規模と趨勢を貿易統計から把握し，一大中継港シンガポールの商人ネットワークがいかに関内交易の動態を生み出したかを史料から実証することで，19 世紀の東南アジア地域経済発展の本質を再考する。

### フィールドワークから得られた知見について

本研究では，19 世紀の東南アジア 6 つの地域（蘭領東インド，英領ビルマ，英領マラヤ，仏領インドシナ，フィリピン，タイ）の貿易統計を収集・整理する必要がある。今回の派遣では，蘭領東インドの貿易統計を収集するべく，宗主国であったオランダにあるライデン大学中央図書館を訪問した。19 世紀前半以降，オランダによる植民地化はジャワを中心に開始され，20 世紀初頭によりややく現在のインドネシアにあたる範囲が統治下に置かれた。従って，19 世紀の貿易統計も時期によって把握範囲（貿易相手地域，商品分類など）が異なる。本派遣では蘭領東インドの貿易統計の収集により，その把握範囲の変

化を知ることができた。

蘭領東インドの領域範囲の基礎となったのは、英蘭でマラッカ海峡を境に南北で領域を確定した 1824 年条約である。初期の段階でオランダはジャワに統治の重点を置き、1825 年以降にジャワの貿易統計を、1846 年にジャワ以外の島々（外島）の貿易統計を刊行し始めた。この時点ではジャワと外島の貿易統計は別々の刊行であり、現在の国家単位でいえば、外国貿易にあたる中国との貿易と共に、例えばジャワとスマトラとの間の国内交易も把握可能であった。この把握範囲は、1874 年にジャワと外島の貿易統計が廃刊となり、両者を蘭領東インドという一つの単位にまとめた、新たな貿易統計が刊行されたことで変化した。この貿易統計では蘭領東インドと中国との外国貿易は把握可能であるが、その国内交易、すなわち多数の島々からなる広大な領域内部の交易が把握不可能となった。その後、国内交易統計が刊行され始めるのは 1914 年以降である。

以上、19 世紀の蘭領東インドの貿易統計の把握範囲は、1825 年から 73 年は外国貿易と国内交易が捉えられるが、1874 年から 1913 年は外国貿易のみである。現状では 19 世紀末の蘭領東インド内の交易、すなわち本研究でいう域内交易を貿易統計から把握することは難しいと分かった。



**写真 1** オランダ・ライデン市の運河：ライデンの街並みはいたるところに張り巡らされた運河を中心に作られている。

#### 今後の展開・反省点

本派遣の成果は 19 世紀の蘭領東インドの公式貿易統計を収集したことである。これにより、19 世紀

の東南アジア域内交易の展開を数量的に把握するための史料群の一部が整えられた。しかし、前述したように、1874年から1913年の蘭領東インドの国内交易が現状では把握できず、その期間の域内交易の実態解明の障害となることが予測される。まずは収集してきた貿易統計を整理・分析することで、統計の性質を深く理解し、この問題を乗り越えるための方策を考えていきたい。加えて、蘭領東インドの国内交易統計の欠落を埋める史料を探索すると共に、他の東南アジア地域の貿易統計の収集も進めていく。

また今回は貿易統計が約60年分と膨大な量に上ったため、史料の複写を写真で入手する方法を採用した。このデジタルデータでの史料保管・利用の作法を身につけるとともに、テクノロジーの発展に伴う歴史資料の活用可能性の拡大に寄与しうる、知識の体系化を行っていきたい。



写真2 オランダ・ライデン市の風車：16世紀以降、オランダ東インド会社を筆頭に、貿易国家として繁栄したオランダの、シンボルマークの一つが風車である。